

研究主題

「豊かな心を育み、よりよく生きようとする生徒の育成」

～考え、議論する道徳科の授業実践を要として～

加須市立加須西中学校

1 研究主題の設定理由

グローバル化の進展、情報通信技術・科学技術の急速な進歩、少子高齢化の進行、新型コロナウイルス感染症への対応など、生徒を取り巻く環境が大きく変化している。

このような中で、生徒は一人一人が道徳的価値の自覚のもと、自分のよさを認め、他者と協働しながらよりよい生き方を目指す資質や能力を身に付けることが求められる。本校では「自分にはよいところがあると思う」と答えられる生徒の割合が県平均と比べて6.9%低い。(県学力・学習状況調査質問用紙より) この課題の解決に向け、全職員が「考え、議論する道徳科の授業」を要にして道徳教育に取り組む。この実践を通し、生徒一人一人が自分に自信をもち「自己肯定感」が高まることで「よりよく生きようとする生徒の育成」に迫れるのではないかと考え、本主題を設定した。

2 研究の仮説

- (1) 全職員参画のもと道徳科の授業実践を要として全教科で「自分の考えをもち、他者との話し合い活動」を実践することで、自分で考えるだけでは気付かなかった多面的・多角的な考え方をもち、人間としての生き方について考えを深めることができるだろう。
- (2) 集団の中で個が埋没してしまわないよう個のよさを見つけ、伸ばす工夫をすることで、一人一人のよい点や可能性を引き出す研究を推進する。そうすることで、「自己肯定感」の向上が期待され「よりよく生きようとする生徒の育成」に迫ることができるだろう。

3 研究の経過

月	内 容
4	研究推進委員会（研究計画立案、今年度の取組及び研究の方向性の確認）
5	校内研修①（授業の方向性、研究授業者の決定、プランニングシートの作成、道徳科学習指導案の形式の確認、指導案検討会）
6	研究授業① 2年2組 山口陽菜 教諭 3年2組 猿山恭弘 教諭 指導者 埼玉県教育局東部教育事務所教育支援担当指導主事 鈴木久美子 様 加須市教育委員会学校教育課主幹兼指導主事 渡辺源 様
7	校内研修②（道徳科授業ローテーション表の作成、道徳通信の作成・発行 等）
8	校内研修③（指導案検討会、道徳科授業の発問、板書例の蓄積、道徳通信の作成、授業の説話集・タブレット活用事例の蓄積 等）
9	研究授業② 1年2組 榊原由佳 教諭 3年1組 老本拓矢 教諭 指導者 埼玉県教育局市町村支援部義務教育指導課指導主事 山本直人 様 指導者 幸手市立幸手中学校校長 島方勝弘 様

9	校内研修④ 演題：「考え、議論する道徳科の授業を創る」 講師：開智国際大学 教授 土井雅弘 様
10	研究授業③ 1年1組 清水優斗 教諭 2年1組 山中良太 教諭 道徳科授業ローテーションの実施
11	校内研修⑤ 演題：「豊かな心を育み、よりよく生きようとする生徒の育成」 ～考え、議論する道徳科の授業を要として～ 講師：共栄大学 教授 濱本一 様
12	校内研修⑥ 人権教育 指導者 加須市教育委員会学校教育課主幹兼指導主事 大舘隆弘 様
1	校内研修⑦（指導案検討会、教員アンケートの実施・分析、Hyper-QUの分析、 生徒アンケートの実施・分析 等）
2	道徳教育推進モデル校研究発表 校内研修⑧（今年度の研究のまとめと来年度の計画）

4 研究の内容

(1) 授業研究部の取組

ねらい：指導内容や工夫を全職員で蓄積・活用することで、考え、議論する道徳科の授業の実現を図る。

① プランニングシートの活用

プランニングシートを用いて授業の構想を練ることで、らいや中心発問など授業の核となる部分を明確にした。

② 生徒の意見や条件・状況の可視化

ネームカードや心情メーターを用いた思考表示により、学級全員の考えを視覚的にとらえることができる。また、大型モニターを用いることで、生徒全員が共通の具体的なイメージをもって活動に取り組むことができた。

③ 学習形態の工夫

- ・ワークシートの回し読み（班員の意見を参考にして自分の考えを整理する。）
- ・タブレットの活用（人前で意見を発表することが苦手な生徒に、意見発表の場を作れた。短時間でより多くの意見に触れることができる。）
- ・起立して意見交換（机の移動なしで、班員の顔を見ながら意見交換ができる。）
- ・フリーに意見交換（教室中を自由に移動して、様々な意見を共有・交換する。）

④ タブレットの活用の推進

タブレット端末の活用事例を蓄積することで、道徳科の授業のみならず、多くの授業でタブレット端末の効果的な活用を促す。またその活用事例が効果的かどうかまで記録することで、タブレット端末活用の質の向上を図った。

⑤ 授業記録の蓄積

- ・授業ごとに発問の記録（生徒の反応も記録し、発問の質の向上につなげる。）
- ・道徳説話集の蓄積（教員の体験談など、内容項目にあったエピソードを紹介することで、生徒に身近な問題としてとらえさせることができる。）

⑥ ローテーション授業の実施

- ・複数の教員の指導法で、考えを深めることができる。（生徒）
- ・教員の得意分野を生かして、授業を展開できる。（教員）



⑦ 自己を見つめる時間の設定（終末）

授業の終盤では、自らを振り返り考えを深める時間を大切にしました。学習を通して生徒の心の変容を見取り、教師の指導力の改善・充実に活かすことができました。

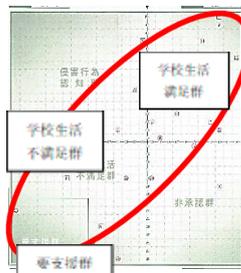
(2) 調査研究部の取組

ねらい：アンケート等の分析を通して、生徒の実態と変容を把握し指導に生かす。

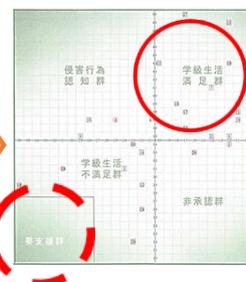
① Hyper-QU を活用した学級の実態把握

斜めに伸びているまとまりのない配置だったクラスだったが、右上の学級生活満足群が増え、居心地のよさを感じることができるようになった。左下の不満足に残る生徒たちへのサポートを続けていくことが必要である。

6月の結果



12月の結果



② 学校行事前の学級討議と行事の振り返り

体育祭、音楽会前に学級討議を行い、各クラス独自の目標を設定した。目標に向かって取り組むことで、自分たちで学校行事を作り上げ、成功させた達成感を味わわせた。学校行事後にアンケートを実施し、生徒の取組を見取った。

③ 生徒アンケートの実施

生徒の実態や研究の進捗状況を把握する目的で、2回のアンケートを実施した。「自分は人の役に立っている」「自分には様々な可能性がある」といった項目において大幅にポイントが向上し、自己肯定感や自己存在感の高まりが感じられた。

(3) 環境整備部の取組

ねらい：生徒の学習や活動を振り返る環境づくりをすることで、自己存在感・自己肯定感を育む。

① 道徳コーナーの充実

毎時間、道徳科の授業後の板書を写真に撮り、生徒の感想を入れた掲示物を作成し、教室の道徳コーナーに掲示している。クラスメイトの意見や感想を共有しながら、生徒が学習したことを振り返れるよう工夫している。

② 道徳通信の発行

本校の課題である「家庭内でのコミュニケーション」を促進する目的で、家族との会話のきっかけとなるような道徳通信を発行した。

③ 校内掲示の充実

・ありがとうの花束

学期末ごとに、花びら型のカードに自分が受けた嬉しい行動や感謝の気持ちを記入し、掲示している。生徒の善い行いを積極的に取り上げ、生徒が感謝の気持ちをお互い伝え合うことで、自己存在感や自己肯定感を育む。

・各行事の振り返り

クラスや学年、学校への所属感を育むことを目的とした、掲示物を作成した。友人や先輩、後輩に宛てたメッセージを掲載し、昇降口に掲示した。



ありがとうの花束

(4) その他の取組

① 小中連携

小中が連携して研究を進めることで目指す生徒像を具現化する。具体的には、「西中学区小中一貫教育事業」の実施(年2回の合同会議)、小学校主催の道徳研修会への参加、小中連携してのあいさつ運動などを行った。

② 「彩の国の道徳」の活用

各学年の生徒の実態に応じて「彩の国の道徳」の教材を選択し、年間指導計画に位置づけた。また、本発表(2月)においては、2クラスが「彩の国の道徳」の教材を用いて公開授業を行うなど、教材を積極的に活用することができた。

③ ルーティンチェック

生徒会の発案で、学校生活に関わる「チェックリスト」を作成。生徒たちは学期毎に、生活規律を意識した生活をし、帰りの会で自己評価を行った。その結果を学年毎に集計して掲示物を作成し、今後の生活の見直しに役立てている。

5 研究の成果と課題

(1) 成果

① 研究主題に迫る取組により、教員全体の授業に対しての意識が向上した。(教員の道徳科の授業に関する学校評価の数値はこの1年で+0.2ポイント)また、授業実践の記録や発問の蓄積、説話集やタブレット端末の使用例の蓄積を行うことで、道徳科授業の質の向上が図られた。その結果、生徒がよりよく生きるための資質や能力を養う授業へとつながり、研究主題に迫る一助となった。また、生徒の道徳科の授業に関する学校評価の数値は、1年間の研究を通して、+0.2ポイント上昇し、道徳科に対する生徒の意識の向上が見られた。

② 研究を通して、生徒の自己肯定感が向上した。(生徒アンケート結果「自分は人の役に立っている」の割合、約+10%、hyper-QUにおける数値の変化より)学校生活全体を通して生徒の活動を褒め、認めることで、存在意義や所属感が高まったといえる。また、生徒の学校生活の満足度に関する学校評価の数値は1年間で+0.2ポイントとなり、生徒の自主性や主体性の成長につながった。

③ 「節度・節制」に関する内容項目の授業を年間指導計画に位置づけて意識的に行ったり、学校生活に関わる「ルーティンチェック」を定期的に行ったりすることで、規範意識や生活規律の改善が見られた。特に学校評価の数値(「あいさつ」の項目)は、昨年度と比べて+0.2ポイントとなり、規律ある態度の向上につながった。

(2) 課題

① 1年間の研究を通し、hyper-QUの結果分布にまとまりが表れ、一定の効果が見られる生徒がいる一方で、自己肯定感がなかなか向上しない生徒もいる。誰もが皆認められ、自信をもって活動できるための工夫をしていく必要がある。

② 新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、活発な話し合い活動をどこまで実践できるかが焦点となった。今後タブレット端末の活用事例の蓄積や利用方法の研究を重ねることで実情に合った効果的な活動を見いだすことができると思う。